特集

コミュニケーション活動

子どもの「コミュニケーション」をめぐる「動き」と「工夫」

社会の急激な変化にともない、子どもの「コミュニケーション」に関する施策がさかんに行われつつあります。今回は、横浜国立大学の髙木展郎先生のお話を中心に、学校でのコミュニケーション教育について見ていきます。

取材・文｜甲斐ゆかり（サード・アイ）　イラスト｜あきんこ

新しい時代に求められる「学力」とは何か

21世紀は「知識基盤社会（knowledge-based society）」の時代であると言われています。これは、平成17年の中央教育審議会答申において、「新しい知識・情報・技術が、政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す社会」であると述べられていることに起因します。

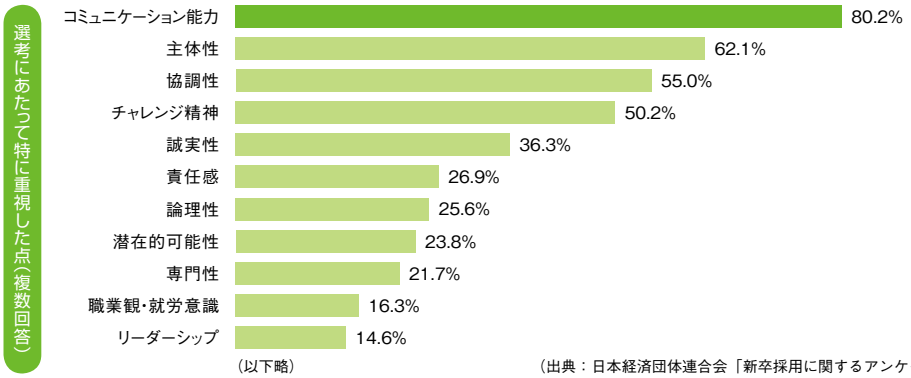
実際、近年は、政治・経済・文化のいずれもが「グローバル化」の名のもと、世界規模で大きく動いています。子どもたちは、このような変化の激しい社会を生きていかなくてはなりません。

そこで必要となるのは、新しい時代環境を生き抜くための適応能力です。

例えば経済では、日本はこれまで高い技術力や勤勉性で世界の製造業をリードしてきました。しかし、新興国の追い上げや世界的な不況などにより、それだけでは世界と勝負できなくなりつつあります。そこで、全く新しい発想や技術をもった、クリエイティブな人材が一層求められています。

そこでは、国籍や社会的立場などの異なる様々な人々と、意思を伝え合い、自分の考えを表現し、問題を解決していくこと＝コミュニケーションが必要不可欠です。事実、産業界では、新卒採用の際に重視する要素として、コミュニケーションが最上位に挙がっています（資料①）。

資料①●平成23年度の採用選考活動にあたって特に重視した点



（出典：日本経済団体連合会「新卒採用に関するアンケート調査」）

PROFILE
髙木展郎 先生 Nobuo Takagi
教育方法学・国語教育学専攻。中央教育審議会教育課程部会国語専門部会主査代理を務めるなど、文部科学省の仕事にも携わる。現在、横浜国立大学教育人間科学部教授、附属教育デザインセンター長。

「学力が時代によって変わる」ということを正しく認識することが重要です

＊コミュニケーションは、「思考力」「判断力」「表現力」を支える役割をもっています。この特集で扱う「コミュニケーション」とは、言葉や数式などの言語ツールを用いるコミュニケーションと、身体表現など言語以外の非言語ツールを用いるコミュニケーションに大別した場合の前者です。

これまでの学校の授業は、主に知識の伝達が大きな役割でした。しかし、これからはコミュニケーションという活動を通した様々な能力の育成が求められます。ここでの能力とは、例えば、覚えた知識をそのまま取り出す能力ではなく、自分で考え、判断し、表現するという能力になります。

学校教育の中でコミュニケーションを豊かにするには、言葉を用いた活動を充実させることが必要です。新学習指導要領で「各教科等における言語活動の充実」が図られているのには、そのような背景があるわけです。

今までやってきた教育が間違っていた、ということでは決してありません。しかし、時代が求める能力を子どもに身につけさせるには、先生自らが発想を大きく変える必要があることに気づいてほしいと思います。

資料②

●学校教育法第30条第2項

前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

（第49条で中学校に準用、第62条で高等学校に準用）

コミュニケーションはアビリティ（能力）というよりアクティビティ（活動）的なもの

一方、「コミュニケーションとは何か」と考えたとき、その含む意味を的確に言い表すのはなかなか容易ではありません。

例えば「コミュニケーション＝人の意見を聞き、意味をまとめる能力」とすれば、それは「理解力」や「読解力」といった一面を切り取っているに過ぎません。自分の意見を伝える「表現力」や、的確な言葉を用いる「語彙力」といった面が抜け落ちているからです。

私は、コミュニケーションについては、「～できること」という「能力（Ability）」よりも、「～すること」という「活動（Activity）」ととらえるほうが、より実態に合っているのではないかと考えています。学校教育法第30条第2項（資料②）は、これからの学力観を提示したものですが、コミュニケーションを、そこに出てくる思考力や判断力、表現力といった「能力」を支える「活動」として考えてみると、両者の関わりがクリアに見えてきます。また、日本語や数式などの「言語」は、コミュニケーションを図るための道具（ツール）と定義できます。

これらの道具を使って人と関わること、その「活動」がコミュニケーションであり、「各教科等における言語活動」の要素の1つになります。

子どもにどんな学力をつけるか 全体を見渡したマネジメントが必要になります

つけたい学力の手順と方法を示すことが指導の第一歩

世界と比較しても、日本の先生は素晴らしい指導力をもっています。しかしながら、年間を通じて、子どもにどのような学力をつけたいかを計画することについては、それほど得意ではない人が多いようです。

それはある意味では仕方のない部分もあります。前にも述べたように、従来の学校教育の主な役割は、「知識の伝達」でした。そのため、答えが「わかること」が重視され、「考えること」のプロセスがずっとあいまいになってきたのです。先生の間で「言語活動を取り入れなければ」という意識は高くても、なかなか実践につながりにくいのには、そのような事情もあるでしょう。

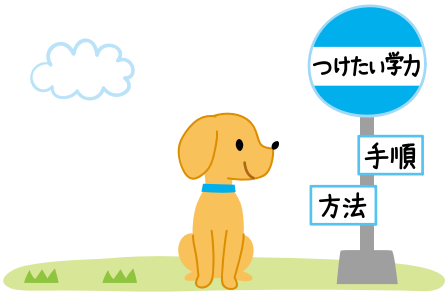
しかしこれからは、1年間あるいは6年間といった長い視点で学習内容を見渡すことのできるカリキュラム・マネジメント能力が求められてきます。

「カリキュラム・マネジメント」とは、カリキュラムを計画し、実施し、評価し、改善を図るという一連のサイクルをもったシステムで、学校経営の中核的な機能を担うものです（**資料③**）。年間のカリキュラムのどの期間に、どのような活動を行うことで、各教科等の観点のどこを評価するか。その「手順」と「方法」を指導案に示し、全体像を描ききることが、新しい学力観のもとでの指導の第一歩だと言えます。

これまでの日本の授業研究は、おおむね1単位時間が基本となっていました。そのため、「指導案を書く」となると、多くの先生はその時間内に全ての評価の観点を網羅するような案を書く傾向にあります。しかし、大切なのは、1つの単元の流れの中で全ての評価の観点を評価できるように、活動を適切に割り振って配置していくことです。つまりこれからは、指導案に対する考え方も変えていかなければならないわけです。

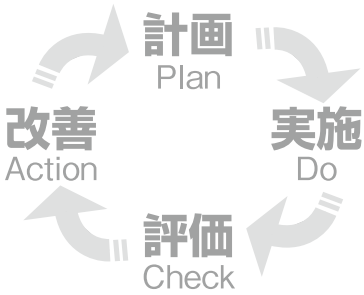
目標が明確になることで、今やるべきことが初めてクリアに見えてきます。子どもに学力をどうやってつけていくか、そのスキルを、ぜひ磨いていってほしいと思います。

なお、コミュニケーション活動がさかんに展開する授業を実現するには、管理職をはじめとする学校全体で、1年生のうちから取り組む姿勢が必要です。



資料③

カリキュラム・マネジメントにおけるPDCAサイクル



コミュニケーション活動のコツは「いい先生」にならないこと？

実際の授業場面でのポイントについては、これも、従来の発想からの大きな転換が必要です。

よく見られることですが、優秀な先生ほど、授業でいろいろなことに気がつくもの。子どもの発言を細かく取り上げたり、聞き取りにくいときはもう一度説明したりするなど、とにかく行き届いています。ですが、授業がスムーズに進む＝子どもが活発にコミュニケーションを取るようになる、とは限りません。

例えば、先生が親切に子どもの発言を聞き取って、他の子どもにもう一度説明してあげることを続けた場合、子どもたちは、発言者である子どもの意見を次第に聞かなくなっていくでしょう。なぜなら、子どもたちは「先生がもう1回まとめてくれる」という誤った理解をしてしまうからです。

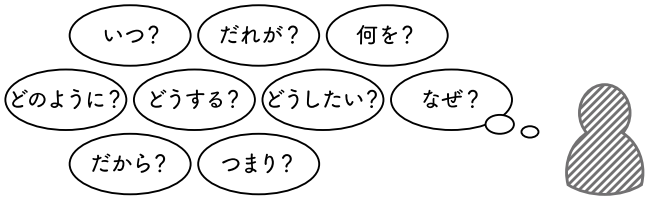
子どもの意見を引き出し、コミュニケーションを図りたいときの先生の発言は、そのきっかけとなる数回で良いのです。「いい先生」は、往々にして、子どものやることを先回りして、全てを指示してしまう。確かに素晴らしいことですが、それでは子どもが自分で「考える」ことをしなくなります。

くり返しになりますが、今までの先生は、唯一絶対の答えを「教える」ことが仕事でした。しかし、これからは、子どもが、自分なりの答えを「考える」こと、また、その過程で豊かなコミュニケーションが展開するような指導が求められています。何気ない授業の場面で、子ども同士が自然に会話をしながら考えを深めたり、広げたりできるような授業を作っていってほしいと思います。そうした授業は、教室が子どもたちにとって居心地の良い場になるという効果も期待できるでしょう。

授業の中でできること（例）

★1年生から「考える」習慣をつけさせる

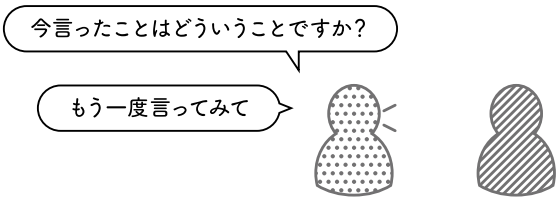
授業の中の話題について、子どもたちは自分でしっかりと考えられているでしょうか。「いつ」「だれが」「何を」といった情報についてこちらから質問するなどして、意識づけをしましょう。



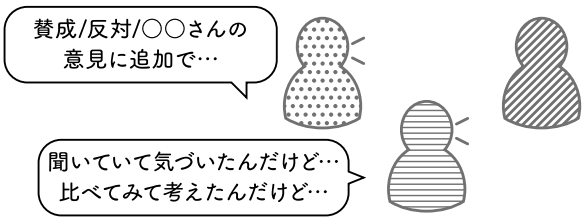
★友だちとの関わり方を意識させる

意見を言うときは、分かりやすいように結論から先に述べ、気づいたことや考えたことを具体的に表現するように指導しましょう。

意見を聞いたときに、もしよく分からなければ、問い直すよう、あらかじめ助言をしておきます。

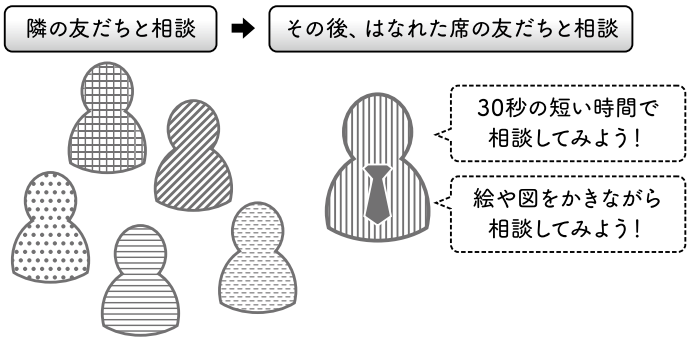


友だちの意見や、話題に対して、賛成・反対・追加などを明確にして発言させることも大切です。

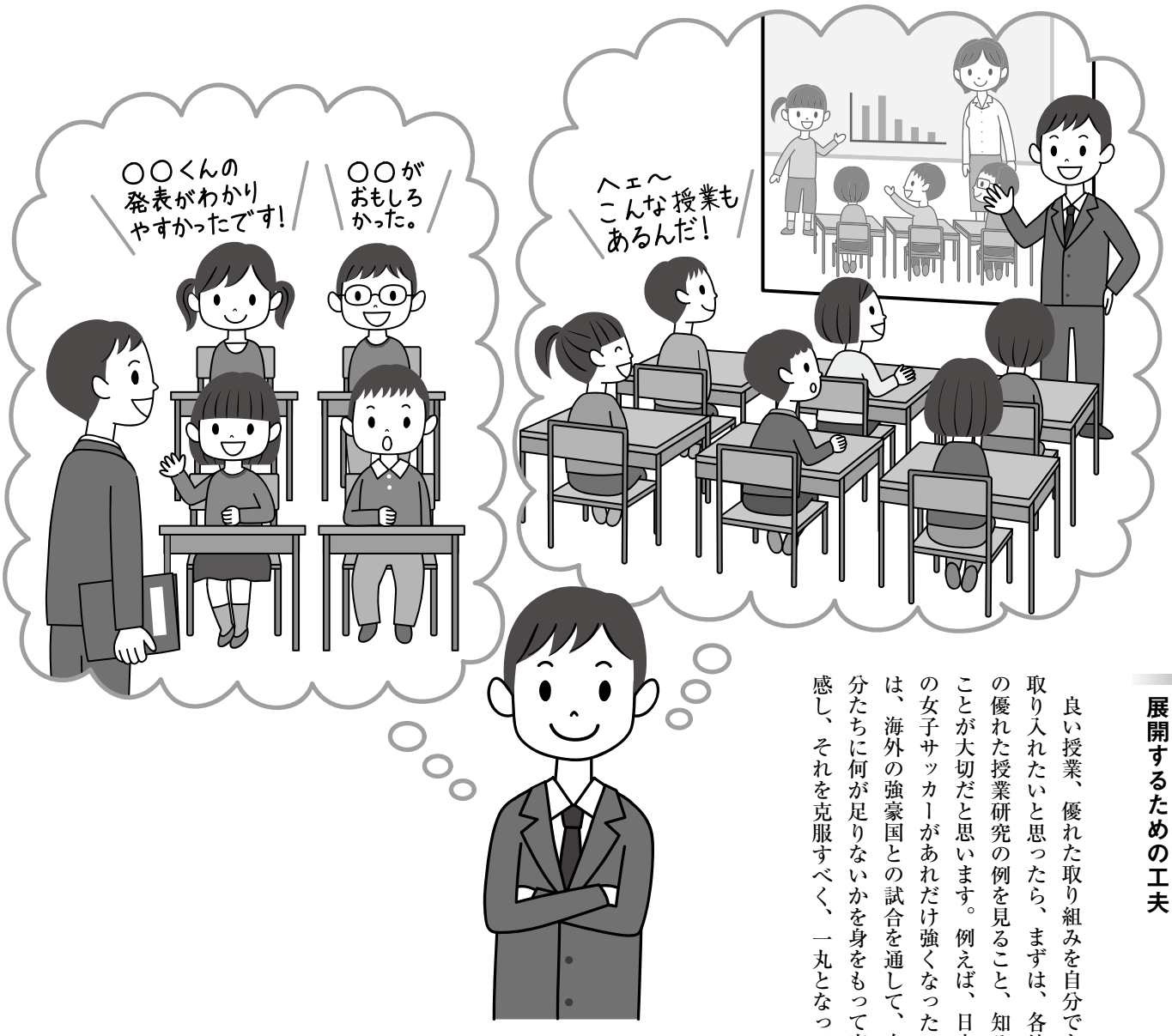


★相談する時間を設け、いろいろな相談の仕方に慣れさせる

自分で考えたあと、友だちと相談するよう促しましょう。このとき、「だれに相談するか」、「どんなふうに相談するか」が重要です。



優れた実践例を見る、子どもに授業評価を聞く、学校全体で取り組む。子どもだけでなく、先生も「学び合う」環境を。



コミュニケーション活動を展開するための工夫

良い授業、優れた取り組みを自分でも取り入れたいと思ったら、まずは、各地の優れた授業研究の例を見ること、知ることが大切だと思います。例えば、日本の女子サッカーがあれだけ強くなったのは、海外の強豪国との試合を通して、自分たちに何が足りないかを身をもって実感し、それを克服すべく、一丸となって取り組んだからです。授業もそれと同じで、まずは自分の目で確かめる努力をしてほしいと思います。

また、コミュニケーションが良い形で展開されている実践の映像を、子どもたちに見せるのも1つの方法でしょう。「こんな授業がしたい」という理想のイメージがあっても、やり方を急に変えたら、子どもたちはついてくることができません。映像があれば、子どもにどんなふうに学んでほしいのか、具体的に伝えることができます。さらに、上の学年の授業の様子を子どもたちに見せて、上の学年の子どもたちの学び方を学ばせるのも良いでしょう。

また、研究授業など、先生同士で意見を交換する機会をもつ他に、授業の感想を子どもたちに聞くことも先生の学びへとつながります。

注意したいのは、優れた実践例をそのままそっくり再現しようとしないことです。実践に「唯一絶対の正解」はありません。**学校の実態や目の前の子どもたちの状況に合わせ、柔軟に対応してください。**

教育とは、成果が出るまでに時間のかかるものです。実感として、学校全体が活発に動き出すのは、取り組みを始めた頃に3年生だった子どもたちが6年生になる頃でしょう。6年間全体を見渡す「大きな視点」と、今やっていることを把握する「小さな視点」の両方をもって、学年全体、学校全体で根気強く取り組んでいきましょう。

資料

**最後に、子どものコミュニケーションに関する資料を集めました。
今後の実践の参考にしてください。**

WEB SITE

言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1301088.htm
思考力・判断力・表現力等をはぐくむ観点から、それぞれの教科等において言語活動を充実させるための基本的な考え方、言語の役割をふまえた指導について解説した文部科学省のページ。さらに、優れた指導事例を100事例収録。

新学習指導要領・言語活動を充実させる指導と事例

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1301060.htm
言語活動の参考となる具体的な指導事例を掲載した文部科学省のページ。国語科をはじめとする全ての教科等の取り組みが収集されている。

コミュニケーションをわかっている教師になろう!

http://www.yomiuri.co.jp/nie/note/comu/top.htm
読売新聞サイト内に設けられた先生向けのページ。連載「教育ルネサンス」内の記事のアーカイブや、コミュニケーションの基礎が分かるサイト紹介、おすすめ本やおすすめツールなど、実際の教師生活に具体的に役立つ情報が掲載されている。

リセマム

http://resemom.jp/
小・中・高校生の子どもをもつ保護者と、教育関係者向けの教育情報サイト。小学生については、最近話題のニュースやトピックス、小学生向けのイベントなど、子どもに関係する情報が充実している。

BOOKS

各教科等における言語活動の充実
その方策と実践事例

編／髙木 展郎
教育開発研究所　￥2,520(税込)
今回取材にお答えくださった、髙木展郎先生が編者の1冊。言語活動の意味、言語活動の位置づけ、内容・方法等について、各教科等の実践事例を掲載し、様々な先生が具体的に解説。資料として手元に置いておきたい。

言語活動モデル事例集

編／水戸部 修治
教育開発研究所　￥2,520(税込)
文部科学省の教科調査官が編集。言語活動について全国31の小・中学校の事例を、1.学校全体、2.国語科、3.各教科等、4.評価 にわたって紹介・解説。各取り組みを分析し、学ぶべきポイントも明示されているので、すぐに実践に役立つ。

「分かりやすい表現」の技術
意図を正しく伝えるための16のルール

著／藤沢 晃治
講談社　￥840(税込)
内容はビジネスマン向きだが、「分かりやすさ」とはどういうことか、どんな風に情報発信すれば分かりやすく伝わるか、具体例と改善例を交えて解説されており、授業改善の参考に活用できる。